

日本の名作名文ハイライト

わかれ道

樋口 一葉

朗読
voicedrop

出所
朗読三昧

<http://www.voiceblog.jp/voicedrop/>

teabreak 編

わかれ道 樋口一葉

上

お京さんいますかと窓の戸の外に来て、こと／＼と羽目を敲く音のするに、誰れだえ、もう寝てしまったから明日来ておくれと嘘を言え、ば、寝たって宜いやね、起きて明けてお呉んなさい、傘屋の吉だよ、己れだよと少し高く言えば、嫌な子だねこの様な遅くに何を言いに来たか、またお餅のおねだりか、と笑って、今あけるよ少時辛棒おしと言いながら、仕立かけの縫物に針どめして立つは年頃二十余りの意気な女、多い髪の毛を忙しい折からとて結び髪にして、少し長めな八丈の前だれ、お召の台なしな半天を着て、急ぎ足に踏脱へ下りて格子戸に添いし雨戸を明くれば、お気の毒さまと言いながらずっと這入るはちよつと法師と仇名のある町内の暴れ者、傘屋の吉とて持て余しの小僧なり、年は十六なれども不図見る処は一か二か、肩幅せばく顔小さく、目鼻だちはきり／＼と利口らしけれど何にも脊の低くければ人嘲けりて仇名はつけける。御免なさい、と火鉢の傍へづか／＼と行けば、御餅を焼くには火が足りないよ、台処の火消壺から消し炭を持って来てお前が勝手に焼いてお食べ、私は今夜中にこれ一枚を上げねば成らぬ、角の質屋の旦那どのが御年始着だからとて針を取れば、吉はふふんと言って彼の兀頭には惜しい物だ、御初穂を我れでも着て遣ろうか

と言えば、馬鹿をお言いでない人のお初穂を着ると出世ができないと言うではないか、今つから延びる事ができなくては仕方がない、その様な事を他処の家でもしては不用よと気を付けるに、己れなんぞ御出世は願わないのだから他人の物だろうが何だろうが着かぶって遣るだけが徳さ、お前さん何時か左様言ったね、運が向く時になると己れに糸織の着物をこしらえてくれるって、本当に調べてくれるかえと真面目だって言えば、それは調らへて上げられるようならお目出度なもの喜んで調らへるがね、私が姿を見ておくれ、この様な容体で人さまの仕事をしている境界ではなからうか、まあ夢のような約束さとして笑って居れば、いいやなそれは、できない時に調らへてくれとは言はない、お前さんに運の向いた時の事さ、まあその様な約束でもして喜ばして置いておくれ、この様な野郎が糸織ぞろへを冠った処がおかしくもないけれども淋しそうな笑顔をすれば、そんなら吉ちゃんお前が出世の時は私にもしておくれか、その約束も極めて置きたいねと微笑んで言えば、そのつはいけない、己れは何うしても出世なんぞは為らないのだから。なぜ／＼。なぜでもしない、誰れが来て無理やりに手を取って引上げてでも己れはここにこうしているのがいいのだ、傘屋の油引きが一番いいのだ、何うで盲目縞の筒袖に三尺を脊負って産て来たのだらうから、渋を買いに行く時かすりでも取って吹矢の一本も当りを取るのがいい運さ、お前さんなどは以前が立派な人だと言うから

今に上等の運が馬車に乗って迎ひに来やすのさ、だけれどもお妾になると言う謎ではないぜ、悪く取って怒ってお呉んなさるな、と火なぶりをしながら身の上を嘆くに、左様さ馬車の代りに火の車でも来るであらう、随分胸の燃える事が有るからね、とお京は尺を杖に振返りて吉三が顔を守りぬ。

例のごとく台処から炭を持出して、お前は食いなさらないかと聞けば、いいえ、とお京の頭をふるに、では己ればかり御馳走さまになるうかな、本当に自家の吝嗇ばうめ八釜しい小言ばかり言やがって、人を使う法も知りやがらない、死んだお老婆さんは彼んなのではなかつたけれど、今度の奴等と来たら一人として話せるのはない、お京さんお前は自家の半次さんを好きか、随分厭味にできあがって、いい気の骨頂の奴ではないか、己れは親方の息子だけれど彼奴ばかりは何うしても主人とは思われない番ごと喧嘩をして遣り込めてやるのだが随分おもしろいと話しながら、鉄網の上へ餅をのせて、おお熱々と指先を吹いてかかりぬ。

己れは何うもお前さんの事が他人のように思われぬは何ういう物であろう、お京さんお前は弟というを持った事はないのかと問われて私は一人娘で同胞なしだから弟にも妹にも持った事は一度もないと言う、左様かなあ、それではやはり何でもないのだろう、何処からかこうお前のような人が己れの真身の姉さんだとか言ってでてきたら

何んなに嬉しいか、首つ玉へ嚙り付いて己れはそれ限り往生しても喜ぶのだが、本当に己れは木の股からでもでてきたのか、遂ひしか親類らしい者に逢った事もない、それだから幾度も幾度も考えては己れは最う一生誰れにも逢う事ができない位なら今のうち死んでしまった方が気楽だと考えるがね、それでも欲があるから可笑しい、ひよつくり変てこな夢何かを見てね、平常優しい事の一言も言ってくれる人が母親や父親や姉さんや兄さんの様に思われて、もう少し生きていたら誰れか本当の事を話してくれるかと楽しんでね、面白くもない油引きをやっているが己れみたような変な物が世間にも有るだらうかねえ、お京さん母親も父親も空つきり当がないのだよ、親なしで産れて来る子があらうか、己れは何うしても不思議でならない、と焼あがりし餅を両手でたたきつつ例も言うなる心細さを繰返せば、それでもお前笹づる錦の守り袋という様な証拠はないのかえ、何か手懸りは有りそうな物だねとお京の言うを消して、何その様な気の利いた物は有りそうにもしない生れると直さま橋の袂の貸赤子に出されたのだなどと朋輩の奴等が悪口をいうが、もしかすると左様かも知れない、それなら己れは乞食の子だ、母親も父親も乞食かも知れない、表を通る檻樓を下げた奴がやはり己れが親類まきで毎朝きまつて貰いに来る跣跣片眼の彼の婆あ何か己れの為の何に当るか知れはしない、話さないでもお前は大底しっているだらうけれど今の傘屋に奉公する前はやはり

己れは角兵衛の獅子を冠つて歩いたのだからと打しおれて、お京さん
己れが本当に乞食の子ならお前は今までのように可愛がつてはくれ
ないだらうか、振向いて見てはくれまいねと言うに、串戯をお言いで
ないお前が何のような人の子で何んな身かそれは知らないが、何だか
らとつて嫌やがるも嫌やがらないも言う事はない、お前は平常の気に
似合ぬ情ない事をお言いただけれど、私が少しもお前の身なら非人でも
乞食でも構いはない、親がなかるうが兄弟が何うだろうが身一つ出世
をしたらば宜かろう、なぜその様な意気地なしをお言いだと励ませば、
己れは何うしても駄目だよ、何にも為やうとも思わない、と下を向い
て顔をば見せざりき。